

アンドレ・デュフルノー

身の程知らずのわが思いの起源に分け入ることにしよう。

そもそも私には、偉丈夫の大尉、若き傲慢な中尉、寡黙で手強い奴隷商人などの先祖がいたりするのだろうか。スエズ東方に野生状態に戻って暮らす伯父がいて、コルク帽をかぶり、ジョッパーズをはき、唇を苦々しくゆがめる紋切り型そのものというべきその人の背後に、分家筋の者たち、背教者の詩人、栄光や、暗い影や、記憶を背負い込んだ破廉恥きわまりない者たちが、つまり家系図の黒い真珠にあたる人びとが隙あらば登場しようと待ち構えているのだろうか。入植者もしくは船乗りに類する先祖がいるのだろうか。

私の話の舞台となる土地のどこにも、海岸線、海辺、岩礁などは見当たらず、遙か彼方から吹いてく

る西風が栗林を覆う頃には、海風の塩の香は完全に失せ、たとえ気性の粗いサンマロの男や傲岸不遜なプロヴァンス出身の船乗りでも、海への誘いなど聞き取れなかつたはずだ。その栗林の方は、少なくとも二人の男が、これを熟知し、たぶん俄雨が来れば木陰に避難し、ひよつとするとそこで誰かを愛し、そうでなくても夢想に耽ることがあつたはずで、その彼らが見ず知らずの土地の林をめざして旅立つても、仕事を求めて苦勞するばかり、夢など叶うはずはなく、たぶんさらに誰かを愛するだけ、あるいはその土地でただ死を迎える羽目になるだけのことだつた。そのひよりは噂話を聞いただけ、ほんのわずかでも記憶がありそうなのは、もうひとりの方である。

一九四七年夏のある日のこと、母は私を腕に抱き、レ・カール〔クルーズ県の小村。正式名はサ
ン・パルドウール・カール〕の家のマロニエの大木の下に立つていた。それは、厩舎の外壁、ハシバミの木々、木陰が邪魔になつて見えなかつた県道が急に視界に入るあたりだつた。天気はよく、母はたぶん薄手の服を着ていたはず、私はまだ言葉がしゃべれない。県道に落ちた影がまず目にとまり、影の主は母が知らない人だつた。男はたちどまる。そしてじつと見つめる。男は感きわまつた様子で、母の体が少し顫え、尋常でない何かが生じて、昼日中の生き生きしたざわめきが宙吊りになる。やがて男は一步前に進むと、自分の名を口にする。アンドレ・デュフルノーだつた。

あとになつてその男は言つた、私を見たとき、まだ幼かつた頃の母の姿に生き写しだと思つたと。母もまだ言葉がしゃべれず、か弱い存在だつた頃、彼は家を出て行つたのだ。それから三十年が過ぎ、例の大木は昔のままの姿だつたが、子供の方は、見た目は同じでも、別の人間だつた。

それよりさらに時代をさかのぼる昔の話だが、祖母の両親が、孤児を引き取って農園の仕事を手伝わせたのと公共安定所に願ひ出たことがあり、その当時こうしたことがごく普通におこなわれていたのは、子供の保護という名目のもとに、いいことづくめの、贅沢できれいごとの鏡像を両親にさしだしてみせる、狡猾で自己欺瞞的な誤魔化しが横行する今とは別の時代だったからだ。あの頃は、子供に食事をおたえ、屋根の下に寝かせればそれで十分、あとは年長者とつきあいをかさね、困難を切り抜け、生き延びてそれなりの人生を送るのに必要な所作が習得できればよい、たとえ愛情に恵まれなくとも、若ければなんとかなるはず、寒さや苦労や過酷な労働も我慢できるだろうし、おまけに蕎麦粉のガレット、夕暮れ時の美しさ、パンのように芳しい大気が心の慰めになると考えられていた。

こうして曾祖父母のもとにアンドレ・デュフルノーが送り込まれてきた。彼が家にやって来たのは十月もしくは十二月の夜、雨に濡れ、肌を刺す寒気で耳が赤くなっていたと想像してみたい。おなじみのあの道を彼の足が踏みしめたのはこれが最初、そしてもはやこの先二度と同じ道を歩むことはないだろう。彼は例の樹木を、厩舎を、この辺りの地平線が空を切り取るありさまを、玄関ドアを見つめる。ランプの明かりに照らされ、見知らぬ人びとの驚き、感極まった様子、微笑み、無関心な顔が目に入る。そのとき彼が何を思ったのかは想像がおよばない。彼は座ってスープを飲んだ。彼は十年間その家に入った。

祖母が結婚したのは一九一〇年のことだから、この時点ではまだ未婚だった。彼女はこの子の面倒をみた。祖母の特徴となる、私にも馴染みがあるこまやかな愛情をもってこの子に接したのはまちがいない。

い。一緒に畑で働く男らは善良であつても粗野であり、あとを愛情で補うのが彼女の役目だった。アン・ドレ・デュフルノーは家に来る前も後も学校に通うことはなかった。祖母が彼に読み書きを教えたのだ。(私の想像では、冬の夜、黒服を着た年若い百姓女が、戸棚の扉を軋ませながらあげ、上段に置かれていた小さな「アンドレのノート」を取り出し、子供が手を洗つて戻つてくるとそのそばに座る。方言によるやりとりが続くなかで、急に声が格調高くなり、言語をこのうえなく豊かな語に娶せようとして、明確に響きは豊かになる。子供は耳をそばだてて聞いている。最初のうちはおそろおそろ、それから段々と気分を楽にして暗誦する。自分とおなじ階級もしくは種族の人びと、より大地の近くに生まれすぐに大地へと投げ返される運命の人びとにとつてみれば、格調高い言語がもたらすのは威光そのものではなく、その裏にある喪失感と欲望なのだということを、彼はまだ知らずにいる。瞬間に囚われるのをやめることで、時の流れのきつさは弱まり、そして過去の苦悶が蒸し返されるなかで、ふと未来が立ち上がつて見えたかと思うと、いきなり駆け出す。風に煽られ丸裸になったフジの蔓が窓にぶつかり、怯える子供の視線は地図の上をさまよう。) 彼には案外と賢いところがあつた。おそらく「飲み込みが早い」と言われたのではないか。そして私の先祖にあたる人びとは、昔の農民に特有の聡明で控えめな世間知をもつて頭の良さを社会的身分に結びつけることで、彼のような境遇の子供には不似合いな能力を説明するために、あまい根拠のもとに、実はそうだったにちがいないと思える筋書きをもとにして物語を練り上げていった。こうしてアンドレ・デュフルノーは地方の田舎貴族の私生児だということになって、すべてが丸く収まつたのである。